

8単位を超えた何かを求めて

— 小山 剛

法学部法律学科 教授

今年は多めですが、ゼミ生は各学年、15名から20名前後、院生7名。憲法の主要論点を深く学ぶほか、合宿やソフトボールなどのイベントも活発です。

ゼミという言葉は、ラテン語のseminare（種をまく）あるいはseminarium（苗床）に由来すると思われます。ゼミは即効性を求める場ではなく、卒業後の社会において各人が力強く根を張り、幹を伸ばすために必要な経験を積む2年間であると考えます。

私たちのゼミは、憲法について研究していますが、実は、法学部における「憲法」ゼミの位置づけは、かなり微妙です。内科にたとえられる民法、外科にたとえられる刑法とは異なり、裁判の実務で憲法が活用されるのは稀です。公務員についても憲法の重要度は行政法に劣ります。そもそも、多くの学生が進む民間企業は、憲法とはほぼ縁のない世界です。さらに、憲法を必修科目とする資格試験・公務員試験を目指す学生にとっても、「ゼミ」は直接の役に立つものではありません。

憲法を教えることはもとより大事ですが、憲法ゼミの担当者として留意しているのは、教室内外での能動的学修やゼミ生相互の交流を通じてさまざま

な経験を積み、強い苗に育てることです。昨年のゼミ合宿は、雄山の噴火による全島避難命令が解除されて10年の三宅島に行きました。東日本大震災をみても、被災住民の地元への帰還・生活再建は容易ではありませんが、三宅村では、ほぼ全員が帰還しました。また、今年は長野県の湯田中洪温泉に合宿し、江戸時代から続く源泉管理・配湯管理の仕方を見分します。

ゼミ生の進路は多様で、法曹三者、公務員、民間企業のほか、変わり種ではANAのパイロット、法律専門の小規模出版社の社長、JAXAの職員などを輩出しています。研究者志望も少なくありません。最近では、弁護士になつた1期生が独立して事務所を構え、別の1期生が弁護士を呼び寄せ、さらに別の1期生が経営する会社の顧問になつたと聞き、ゼミのつながりを実感しました。卒業生、現役生の、病害虫に負けない力強い成長を願いながら、苗床の管理人としての責任と喜びを感じています。

楽しい活動と仲間同士の切磋琢磨

なかむらたいち

中村太智君 法学部法律学科3年

小山ゼミでは、主に人権分野の研究を行っています。抽象的な憲法上の概念が、具体的にはどのような意味を持つのか等を分析する判例研究を中心としており、この点が、小山ゼミの特徴といえます。また、小山先生はとても博識な方で、憲法に関する小ネタから雑学までさまざまなことを、ゼミ活動全体を通じて教えてください、とても楽しく学習ができます。

現在13期目となる小山ゼミは比較的大きなゼミです。普段の活動の他にも、ゼミナール委員会等の主催するスポーツ大会や、春夏の合宿、他大学との合同ゼミなどの活動があり、法曹、一般就職、公務員といったさまざまな進路を目指す仲間との交流を通じて、自分を成長させる機会に恵まれた環境だと思います。



「根性」「洞察力」「ロマン」で病気に挑む

病気のメカニズムを知ること、よりよい治療法の開発に繋がります。私たちの研究室では、約20名の学生が、神経疾患の未知の領域を探究しています。

三澤日出巳

薬学部 教授

しばらく前に「アイス・バケツ・チャレンジ」で話題となったALS（筋萎縮性側索硬化症）は、中年期以降に発症し、全身の筋肉が次第に動かなくなる神経難病です。ALSは、認知・感覚・自律神経などの脳機能は正常に保たれたままで、運動能力のみが急激に奪われていく、極めて過酷な疾患です。病気が進むと、随意運動のすべてが麻痺して一切のコミュニケーションが不能となる場合もありますが、眼球の動きは比較的保たれることが知られています。テレビなどで、患者さんが目の動きで文字盤を操作して意思を伝える様子を見たことがある方もいるでしょう。また、この病気では白筋（速筋）を動かす運動神経の方が、赤筋（遅筋）を動かす運動神経よりも早く障害されます。私たちの研究室「薬理学講座」では、運動神経の種類により病気の進行に違いがあることに着目し、そのメカニズムを解明することで、ALSの原因究明と治療法の探索を行っています。最近では、そのメカニズムの一

部を担うタンパク質を同定し、ALSにおける運動神経の変性を説明する新たな仮説を発表しました。

当研究室では、卒研生の勧誘パンフレットに「ここでは何をしてもらえるのか」ではなく「ここでは何をさせてもらえるのか」と問うことのできる積極性のある学生を求め、と記しています。研究者に重要な資質は「根性」「洞察力」「ロマン」の3つであると考えています。失敗にもくじけない「根性」と本質を見抜く「洞察力」は個人の努力と訓練で高めることができる資質ですが、「ロマン」は心を奮い立たせる力で、人とのふれあいの中で醸成される部分が大きいと思います。研究室では、教員と学生が教え合い高め合いながら未知の研究領域に挑戦する姿勢を大切にしています。

人生は冒険です。研究室での活動を通して、高い目標を掲げて忍耐強く努力する先導者としての資質を磨き、社会に勇気をもって漕ぎ出してほしいと願っています。

自ら考える力が自然と身につく

ただきよこ 高田季代子君 薬学部薬学科6年

「あなたはどうしたい？」薬理学講座に入ると必ず耳にする言葉です。研究室は教授室との境がなく、いつでも気軽に先生に相談することができます。その時にどうしたいのか、と問われることは「自分が何を目標しているのか」を考え直すきっかけとなり、前進することができます。学部生から博士課程の学生まで、皆が伸び伸びと研究に取り組めているのは、先生方が一人ひとりの思いを理解し、自主性を尊重してくださっているからでしょう。

学生同士の仲も良く、夏にはアイスのとり合いが勃発するなど和気あいあいと楽しんでいます。自ら考え行動する、そんな環境で充実した毎日を過ごしています。

